

下車五合目
担板向頂上
穿板八合目
氷雪上滑降

下富士山

厚木市 荒井 一雄

青き湖

青き樹海にアルプスト

李白の詩界ここに極まる

富士山を下る

五合目にて車を下り、
スキー板を担いで、
頂上へと向かふ...
八合目にて
スキー板を穿き、
氷雪の上を滑降す...

折り折りの記 (70)

万緑の中や高尾の山毛櫨小楢

波多野 重雄

万緑とは見渡す限りの緑という意味で、王安石の「万緑叢中紅一点」という詩に由来する。従来の新緑よりも力強い自然を感じる。一般化したのは昭和十四年の中村草田男の「万緑の中や吾子の歯生え初むる」以降である。高尾山の緑滴る山道を登ると亜熱帯植物の山毛櫨や小楢の大樹に目を見張る。共に落葉高木で、淡緑色の花と黄茶色の花を咲かせ小鳥たちの格好の楽園となる。

(高尾山健康登山親睦会々々)

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(36)

徒然と

音絶えせぬは

五月雨の

軒の菖蒲の

雫なりけり

(『後拾遺集』橘俊綱)

(ずつと音が絶えないのは、家の軒先に差し掛けた菖蒲に伝っている、五月雨の雫の音だったのだなあ)

陰暦五月(新暦では五月下旬から七月上旬)に降る長雨のことを「五月雨」と言います。五月雨の「さ」は、「五月」「早苗月」「早苗月」の「さ」と同様に、田植えを指す古語から転じたもので、「みだれ」には「水垂れ」(垂れ落ちる水)の意味があると言われます。「梅雨」という言葉に、梅の実が「熟す」(つはる)という語源があるように、「五月雨」もまた自然の

変化と結びついた表現でしよう。

歌にある「徒然」には、一人寂しく、次から次へと物思いに耽る様子も込められています。五月雨が降ることを「五月雨」と言い、和歌では「さ乱る」(乱れる)という意味が掛けられます。私には「つれづれ」という響きに「ぼつぼつ」という雨音も感じられるのですが、そうした単調な音の調べは、いつしか心の内側をもトントンと叩いているのでしょうか。

高尾山では今頃、春蟬(松蟬)も鳴いていることでしょうか。春蟬は、夏の蟬よりも早く、五・六月頃に地上に現れます。松蟬の声
揃ひたる
(高浜虚子)



五月雨に濡れ、紫陽花の花の色が濃くなる

松林で一斉に鳴き始めた春蟬の声は、まるで合唱のように調和します。この名句の初句「揃ひ」とは、五月雨のように絶えず鳴き交わす姿とも、短いながらも生を謳歌する、一つ一つの命の輝きも込められているように感じます。

では、私たち人間はどうでしょうか。誕生から青年期、働き盛りの壮年期、中年期から老年期へと毎年一つずつ齢を重ねます。かつては、「初老」とされる四十歳を迎える「四十の賀」、五十歳になると「五十の賀」のお祝いをしました。「算賀」と呼ばれる高齢の祝賀は、四十歳から十年ごとに行い、今では還暦・

古稀・喜寿・米寿などの祝いも含まれています。人間が「生い立つ」ことは、そのまま「老い」ることになりませんが、それは全ての命あるものと同じように喜ばしいことなのです。

も積ります。悲しみを取り去るためには、やはり厳しい修行が必要なのでしょう。

鎌倉時代の説話集に次のような話があります。昔、天竺(インド)に一つの寺があり、たくさんの僧侶が住んでいました。達磨和尚が中の様子を御覧になると、ある部屋では仏を念じ、あるいはお経を唱え、様々に修行をしていました。

「煩惱あれば菩提あり」という言葉のように、碁石には黒石と白石が付き物です。ここに登場する老僧は、囲碁を打ちながら煩惱の黒石を減らすことを願いました。浄らかな白一色になることは難しくても、年輪を刻みながら「心の碁盤」に白色の世界が増えていったのでしよう。たとえ身近な事柄であっても、心の持ちようによって幸せへの架け橋となることを、教えてくれているように思えます。

別の部屋を御覧になると、八、九十歳ほどになる老僧が、二人で囲碁を打っています。近くには仏像もなく、お経も見えませんが、ただただ囲碁を打つばかりです。

達磨が他の僧に聞いてみると、「この老僧二人は、若い頃から囲碁のほかに何もしたことがない。仏の教えも聞いたことがないのだ。それで寺の僧は、二人を憎しみ卑しんで付き合わないのだよ」と答えるのでした。

命嬉しき長生きの、あつぱれ老いの思ひ出や。(謡曲『金札』)

達磨和尚がそのことを他の僧に話されると、ずっと嫌っていた人々も後悔して、尊敬するようになったのでした。

人が「生い立つ」ことは、古木が枝を張って、見事に「老い立つ」ことにならるのでしよう。曇のない眼に、少しずつでも近づいていきたいと、雨に濡れた御神木を見上げながら念じます。

(栃木北部教区普濟寺中)

これを聞いて「おそろく理由があるのだろう」

(『宇治拾遺物語』)